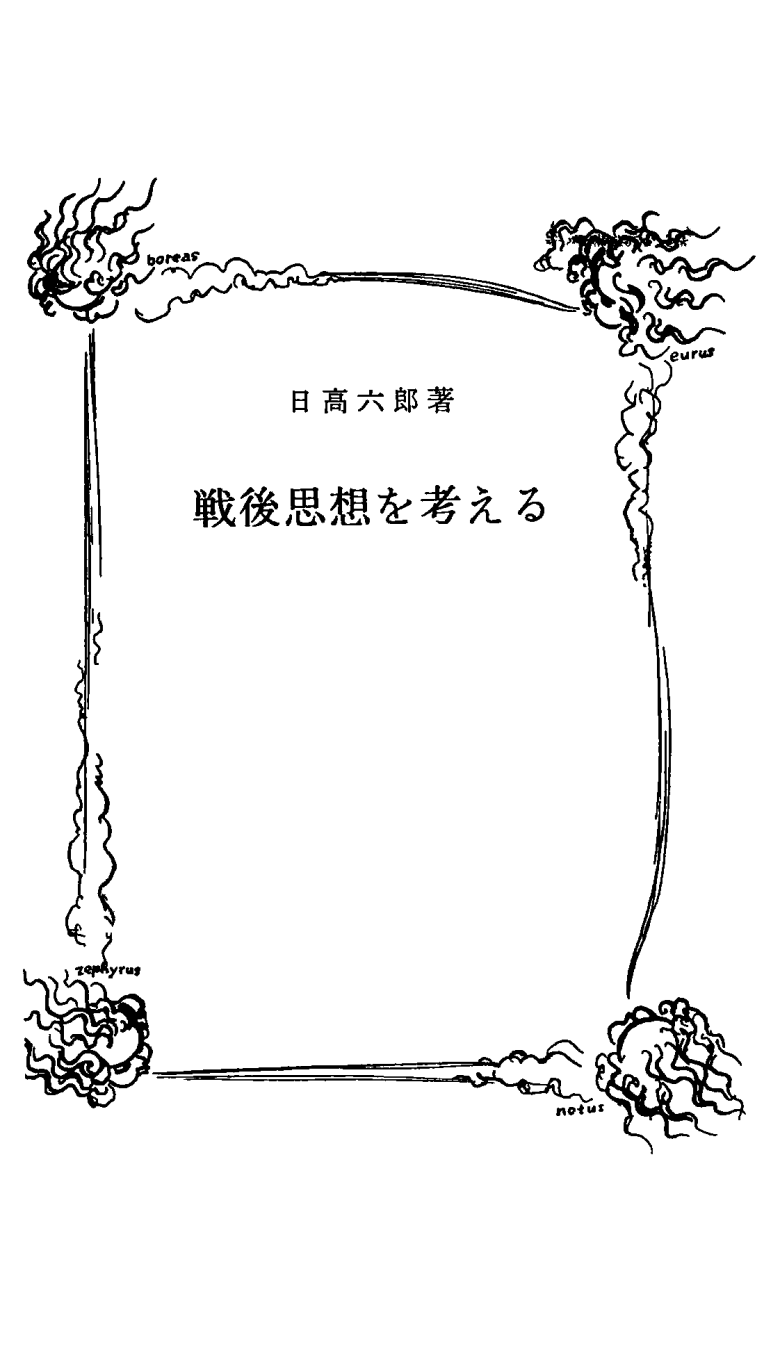
日高六郎著

戦後思想を考える

岩波新書

142



日高六郎著

戦後思想を考える

日高六郎

1917年中華民国青島市に生まれる
1941年東京大学文学部社会学科卒業
現在—京都精華大学教員
著書—「現代イデオロギー」
「日高六郎教育論集」
「人間の復権と解放」
「戦後思想と歴史の体験」
編書—「1960年5月19日」(岩波新書)
訳書—フロム「自由からの逃走」

戦後思想を考える　岩波新書(黄版) 142

1980年12月22日　第1刷発行©
1982年2月25日　第8刷発行

定価380円

著者　日高六郎

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・製本　法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします　Printed in Japan

目　次

戦後思想を考える……一
体験をつたえるということ……二七
私のなかの「戦争」……四九
「滅公奉私」の時代……七五
管理社会化をめぐって……九三
青年について……一二五
四・一九と六・一五……一四五
水俣から考えること……一六一
結びにかえて……一九九

戦後思想を考える

1

私は、京都のある大学で、「戦後思想史」という題で、講義をしている。ただし、戦争中から説きおこした話は遅々として進まず、一学期が終わって、やっと、三木清が獄中で死んだという事実、またそのことの意味などについて、私の考えを話しているようなあんばいである。しかし、高校を出たばかりの学生たち――その多くは女子学生であるのだが――は、いくらか興味を持って、週一回の私の講義につきあってくれる。

教壇の下の席に腰かけている学生たちは、色とりどりのあざやかな服を着て、美しい。そうした学生が、三木清の獄死の前後の話をじっと聞いている。三木清という名前をはじめて聞くものが、これまた大半であるにちがいない。

そして私は、彼女たちの年齢を考えて、愕然とする。まだ二〇歳にならない少女たち。彼女たちにとっては、私はもちろんすでに老人である。

あるとき、ある学生が私に語った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「私の知らないことばかりでおもしろい。昔の歴史という感じね。」

そういう学生であるので、私は「新」憲法などという言葉は、使わないようにしている。日本国憲法とか、いまの憲法とか言う。しかし、私のささやかなひとつの願いは、彼女たちが、遠い戦国時代の話を聞くような風にではなく、私の講義を聞いてほしいということである。まさしく「今」のことを話していると理解してほしいのである。

他面、その「今」のなかでいきいきと生きているのは、彼女たちであって、私ではない。私は「今」の日本の政治や経済や社会のしくみについて、彼女たちよりもたくさんのことを知っているかもしれない。しかし、そうした知識はなくても、いわば「今」の日本をつつむこの得体の知れない粘体のような空気を、もっとも敏感に呼吸しているのは、私よりもむしろ彼女たちである。ゲーテの『ファウスト』ではないが、私は、私の財産として「灰色の理論」のいくばくかを所有しているかもしれない。しかし彼女たちは「緑なす生」そのものとして、私の眼のまえにいる。

私は、三木清が一九四五年(昭和二〇)八月一五日以前にではなく、八月一五日から一ヵ月以上たった九月二六日に獄死したという話をする。私は、中島健蔵さんから聞いた思い出話を伝える。三木清は、疥癬で、栄養失調と不眠とで死んだらしい。三木清が疥癬になったのは、疥癬の病気をもつ囚人の毛布を三木清にあてがった疑いがある。それは、巧妙にしくんだ殺人で

ある。九月二六日朝、看守が三木の独房の扉をひらいたとき、三木は木のかたい寝台から下へ落ちて、床の上で死んでいた。干物のように。

日本政府は、敗戦後にも、三木清を釈放しなかった。そして日本人民は、三木清を救いだすことができなかった……。日本は、戦後、おそらくもっとも重要な思想的な仕事をしたであろうひとりの思想家を失った……。

そして私が次のように語ったとき、すなわち三木清の獄死が東久邇宮内閣を崩壊にみちびいたと話したとき、そして、ひとりの人間の人権が蹂躙されたことにたいするひとりの人間の怒りが、ひとつの政府を倒した、と語ったとき、学生たちは緊張した眼になった。もちろん学生のほとんどはそのことを知らない。

三木清の獄死のニュースを聞いて、ロイター通信の記者がすぐに事情をしらべた。そして、政治犯のすべてがまだ獄中にいるということを知った。おどろいた外国人記者は、山崎巌内相に面会をもとめる。すると山崎内相は答えて「思想取締りの秘密警察は現在なお活動を続けており、反皇室的宣伝を行なう共産主義者は容赦なく逮捕する……さらに共産党員であるものは拘禁を続ける……政府形体の変革、とくに天皇制廃止を主張するものは、すべて共産主義者と考え、治安維持法によって逮捕する」と語る。そのインタビュー記事は『スターズ・アンド・ストライプス』紙(日本占領米軍将兵向けの新聞)に一〇月四日に発表された。これが問題となり、

マッカーサー元帥は、四日夕刻に「政治、信教ならびに民権の自由に対する制限の撤廃、政治犯の釈放」を指令した。なすすべを知らない東久邇宮内閣は、辞職。九日に幣原内閣誕生。一〇月一〇日に、獄中一八年組をはじめとする政治犯が解放される。

敗戦後二ヵ月半たって、山崎内相は平気で、しかもおそらくマッカーサー司令部によってさえ支持されるだろうと信じて、こうした信念を吐露したというのは、ひとつの喜劇である。その喜劇のおかげで、三木清の獄死という悲劇がある。

八月一五日、敗戦と同時に、あるいは数日後に、あるいは一ヵ月後に、だれひとりとして、政治犯釈放の要求をかかげて、三木やその他政治犯の収容されている拘置所・刑務所におしかけなかったということは、いうまでもなく日本敗戦の性格を物語っている。私は、学生たちに、敗戦直後の日本の新聞を、一枚一枚めくって、自分の眼でたしかめることをすすめる。八月一五日を境にして、軍国主義がたちまち崩壊し、民主主義の時代がはじまるなどといった歴史記述が、むしろ事実に遠いことを知ってほしいからだ。それは、スローモーション・フィルムを見ているほどに、緩慢な変化である。

イタリア、ドイツの敗戦、フランスのナチス協力政府の崩壊。そのさいには、戦争が終わるやいなや、たちまちはっきりした変化が起こる。過去はただちに断罪される。政治犯はすぐさま解放される。戦犯ははやくに逮捕される。日本では、軍国主義という瀕死の病人に、まず重

湯を、次にカユを、次にやわらかい米飯をあたえていくように、指導者も新聞も最大限に配慮する。まず君民一体が民主主義であると説かれ、五箇条の御誓文が民主主義であると説かれ、大日本帝国憲法も民主主義の精神にもとづくと説かれ、議会主義は明治からあったと説かれ、やがて英米的議会制民主主義だけが民主主義だと説かれる。その変化のゆるやかさのなかで、そしてそれをたくみに利用して、戦争協力新聞のすべてが、題号も変えずに、戦後に生きのこる。これまた、ドイツ、イタリアの諸新聞、フランスのナチス協力新聞には見られない。

私は、もちろん、三木清の死を知って、山崎内相のもとをおとずれたのは、日本人記者ではなく、外国人記者であったことを、学生たちに話す。外国人記者には、少なくともそうした人権感覚があった。彼らは山崎内相に怒ると同時に、マッカーサー司令部に怒って、そこを訪れる。マッカーサー司令部も抗議をみとめざるをえない。

この成り行きからも明らかなように、敗戦直後に、拘置所・刑務所のまえに釈放の要求を持ってあらわれなかったのは、日本人民だけではなかったのである。日本政府もマッカーサー司令部も対日理事会もまたそうであった。提案は、民間人としての外国人記者によって行なわれたのである。

だから私は、「ひとりの人間の人権が蹂躙されたことにたいするひとりの人間の怒り」が、東久邇宮内閣を倒したと言ったのである。

2

さて、私は次に極東国際軍事裁判のことを話したい。

一九四八年(昭和二三)一二月二三日の新聞がある。たとえば『朝日新聞』。「東条ら七戦犯絞首刑執行さる　今暁零時三五分に終了」と、大きな見出しがある。下のほうに「七つの棺？のせて、ホロ・トラック京浜国道を行く」という見出しもある。同日の社会面には、たとえば「手に数珠を離さず〃西へ急ぐ〃東条　『親鸞』をみんなで回覧」という見出しが読める。

ついでに学生たちに、その同じ面で、奇妙な小さな記事があることを教える。見出しは「『炭管』初起訴　田中、木曾、原口氏」とある。炭鉱国家管理に反対するため、北九州の炭鉱主たちが、前法務政務次官田中角栄民自党代議士に一〇〇万円を贈賄したことが発覚、双方が起訴されたという記事である。

それもまた戦後史のひとコマであるが、それはさておき、私は、翌々日の一二月二五日の新聞を学生に見せる。

見出し。「A級容疑者を釈放　岸氏ら一九名　主要戦犯の処理終る。」釈放された一九名の氏名を全部説明することはやめる。しかし、岸信介(戦時の商工大臣、戦後は首相となる)、児玉誉士夫(上海で児玉機関を設立)、笹川良一(戦時の国粋大衆党総裁)だけには、学生の注意を喚起しよう。

いや、もうひとり、できれば安倍源基(戦時の内務大臣、戦後は衆議院議員)の名も教えたい。彼は特高関係を歩んだ人物である。特高とはなにをするところであったかを、学生たちに知ってほしいのである。

私は、あの寒い冬の日、A級戦犯の処刑を聞いたときの、私の暗くたかぶる複雑な感情を、できるだけ正確に思い出して、学生たちに話してみたい。その複雑な感情のなかみを。

二日おいて、一九人の戦犯容疑者釈放の報道があったのである。一方は絞首刑にされ、他方は無罪釈放となる。明暗二筋道といっても、それら一九人の戦争中の行状を考えるとき、これはだれの眼にもあまりに不公平である。私は、当時、このニュースを聞いて、強いショックをうけた。自分の周辺に、特高警察の眼がまた動きはじめたかのような不気味さを感じた。しかしなぜそうしたことになったのか、私には、その意味が十分にはわからなかった。

冷戦の激化のなかで、私は、鮮明にその意味を理解した。児玉、笹川、岸は、釈放されるべくして釈放された。つまり釈放することのほうが、アメリカの世界戦略の本筋だったのである。東条らの処刑は、終戦処理のための象徴的儀式にすぎなかったのである。東条らの処刑によって、戦後史は変化したか。もちろんそれは一定の変化をひきおこしたと思う。岸らの釈放はどうか。それは、のちにもっと大きな影響をあたえたと思う。してみれば、東条らの処刑よりも、岸らの釈放のほうが、歴史的に重要な事件だったのかもしれない……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

一方には、明らかにアメリカの対日政策の欺瞞と御都合主義がある。他方には、日本政府は当然としても、日本国民が戦争犯罪問題を自分自身の手で解決できなかったひ弱さがある。

そしてロッキード事件。一九四八年一二月二四日に釈放された児玉が主役となって登場し、また、ロッキード・グラマン機種問題で岸前首相が話題にのぼったことに、学生は気がつくだろう。

しかし、そのとき、学生たちは質問するかもしれない。

「三木清を助けることができなかった弱さ、戦犯を日本人の手で追及できなかった弱さを、戦後の大人たちは、どう考えているのですか。」

私は、教壇の上で、何人かの学生たちが、心のなかで、そうした疑問を持っているということをたえず感じる。戦争責任を言うものが、どうして戦後責任からのがれられるだろうか。

敗戦のあと、若者たちは大人によく聞いたものだ。

——大義名分のない日中戦争。無謀な太平洋戦争。そうしたことに気がつかなかったのですか。

——いや、気づいていた人もかなりいたよ。「満州」事変の前後には、『改造』とか『中央公論』とかいう雑誌があって……。

——では、なぜ反対しなかったのですか。

——反対？　そのころには、治安維持法などというすごい法律があってね……。

しかし、若者たちは、大人たちをどこまで信用していいかわからない、といった顔をしたものだ。

いま若者が、戦後について同じようなことを聞いたら、大人たちはどう答えるか。

——児玉とか、だれとか、戦犯がそのまま戦後に生きのびたというけどね、それが生きのびてから、ずいぶん時間がたっていますね。彼らからついに力をうばいとれなかった戦後の革新勢力とは、いったいなんだったのですか。

そのとき、私はどう答えるべきか。

——戦前の古い力を一掃できなかったし、国際情勢の変化があったし、民主勢力のがわにも状況認識のまちがいとか、民衆に根をおろせなかったとかいう弱点があったし……。

若者は、それだけの答えでは、満足しないだろう。

そういう学生たちに、私は「戦後思想史」を語っていかなければならない……。

3

三木清の獄死があり、東条らの処刑死があり、児玉や岸らの無罪釈放がある。この死と生は、多くのことを私たちに教える。いわば、戦後は、その一点からあざやかに照しだされているか

のようである。ましてロッキード事件の主役が、その生への帰還者であってみれば、なおさらのことである。

三木清を獄中から救いだせなかったこと、戦争犯罪の問題を日本人民の手で追及し解決できなかったこと。それは、戦争終結をかちとるための運動が――一部の自由主義的著名人のあいだではひそかに画策されたけれども――、日本人民のなかからついに起こらなかったことと、まっすぐにつながっている。残念ながら、そこには人民の力の弱さがあった。戦争を批判するだけの認識を持つものはかなりいた。そのために獄に投じられた人もいた。しかし、力としてそれが歴史を動かすことはできなかった。

それは、私たちにとって大きな教訓だ。しかし、いま私たちの無力は十分に克服できているだろうか。

三木清の死について、私は、学生たちに、日本人民の無力ということと同時に、日本政府のおどろくほど敏感な秩序感覚と、鈍感きわまりない人権感覚を話した。また、マッカーサー司令部それ自体にも政治犯の運命にたいする無関心があったことを指摘した。そしてひとりの民間ジャーナリストの能動性の見事さを話した。

一九七六年アメリカ議会では、元韓国問題の責任者であったレイナード氏の証言があった。そこには金大中（キムデジュン）氏を連行したのはＫＣＩＡであるという指摘があった。日本の国会で野党がこ

のことを問題にしたとき、日本政府の責任者は、レイナード氏は元官僚であったかもしれないが、いまは職を退いている民間人であるから、その証言をすぐに取りあげることはできないという風に答えた。私は、その敏感な官僚意識と、その鈍感な人権感覚におどろく。ジャーナリストの告発によって政治犯釈放の指令を出したマッカーサー司令部のほうが、残念ながらまだましであった。

ロッキード事件およびその後につづく汚職事件について多くのことが語られた。その構造、その背景、その真相。私はそうしたことがらはすべて重要だと思う。しかし私は、もうひとつ重要な問題があると思う。それは、汚職事件そのものの「真相」はなにかということとならんで、事件にたいして、組織あるいは人びとがどのように対応しているか、という問題である。政府、与野党、財界、言論界、国民。それぞれなにを考え、なにを主張し、なにを行なおうとしているか。金をおくり、金をうけとったものの一部は、法廷で裁かれるだろう。しかしそれは、東条らの象徴的処刑の儀式に近いものになるだろう。そして、容疑者の多くは、かつて児玉や笹川たちが巣鴨からシャバに復帰したように、また復帰するだろう。そうした成り行きが汚職事件の解決だろうか。汚職事件のたぐいの発生を根本的になくすためにはどうすればよいのか。どのような方法が必要なのか。その必要な方法をいまの日本でつくりだすことは可能なのか。そのことを、だれが真剣に論議しているのだろうか。提案しているのだろうか。少なく

とも政府与党のがわからは、それはほとんどないと思われる。私は、そのことがまさしく汚職事件の発生の地盤だと考える。

汚職疑獄事件がつきつけているひとつの問題は、きれいな自民党は存在しうるかということであり、きれいな資本主義は存在しうるかということである。それは保守の政財界人にとっては、たいへん重大な問題だと思う。私個人は、黒い自民党と灰色の自民党と白い自民党とに区分けすることはむずかしいと考えている。また、きれいな資本主義の存在もむずかしいと考えている。しかし、政財界の保守的指導者はそうは考えないにちがいない。少なくともいまよりきれいな自民党、いまよりきれいな資本主義は可能だと考えているにちがいない。もしそうならば、多くの汚職事件に学んで、政財界の自浄の目標と方法について、なぜ熱烈な議論が起こらないのだろうか。とくに財界のあの冷淡な、冷静な反応はどうだろう。私は、それを冷静とは言わない。私は、それを無責任と言いたい。

もし政財界人も、じつはきれいな政治、きれいな資本主義などというのは観念のお話であって、現実はそんなものではないという信念に立っているのであれば、そしてその信念のうえに立って現体制を維持することを考えているとすれば、それはニヒリストの発想である。私は、ニヒリストによる支配は好まない。「きたない資本主義しか存在しない。しかし支配しなければならない。それゆえ残る支配の手段は、力と謀略以外にない。」ニヒリストは、そう考える

だろう。それは、どのように合理化しても、権力主義である。

アメリカでは、ウォーターゲイト事件にさいして、ニクソンを非難して、多くの政財界人が声をあげた。彼らは、彼らの信じる自由主義体制を守ろうとする。彼らは自由主義体制は復原力を持つと信じているし、それに賭けるだけの情熱を持ちあわせている。声をあげれば損をする、出る釘はうたれる、商売人は平身低頭以外にない、ということであれば、いま支配しているのは力のみであって、理念的要素はまったくないということを自白しているのに等しい。

それでは、日本の政財界人にとって、「自由」主義経済というところのその自由主義とはいったいなにを意味するのか。それは、自由に商売をやらせてもらって、もうけさせてさえもらえば、それ以外のことはなにも申しませんということか。そうした無節操な自由主義で支える「自由」主義経済体制の前途に心配はないと本気で信じているのであろうか。

日本のマス・コミの姿勢にもまた同様の傾向が見られる。戦争中の新聞の中心人物が、戦後になって、日本の新聞は大勢の従業員をかかえる大企業となっていたため、当時の政府の方針に協力せざるをえなかったという意味のことを語った。従業員が路頭に迷うことを心配して言論を放棄するのならば、それは言論機関ではなく慈善団体である。もっとはっきり企業の存廃を賭けることはできなかったのだと言ったほうが正直だと思う。その反省のうえに立って、戦後の言論機関は出発した。したはずである。しかし、なしくずしの方向がえが、敗戦後数年た

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton